

日本LD学会第31回大会（@京都） 自主シンポジウム41

「大学における発達障害学生への伴走型支援の可能性と課題」

発達障害のある大学生の 支援のためのアセスメントとその活用

菊地 創

松蔭大学 コミュニケーション文化学部 専任講師

利益相反（COI）開示

- 発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません

菊地 創（きくち そう）

- 松蔭大学コミュニケーション文化学部 専任講師
- 博士（心理学）、臨床心理士、公認心理師
- 精神科病院、児童相談所、保健所などで心理職として従事し、2022年より現職

話題提供趣旨

- 発達障害特性を有する大学生への継続的な支援（伴走型支援）を支えるアセスメント方法や、その活用に関して、利用頻度の高いWAISを中心に話題提供を行う

問題意識

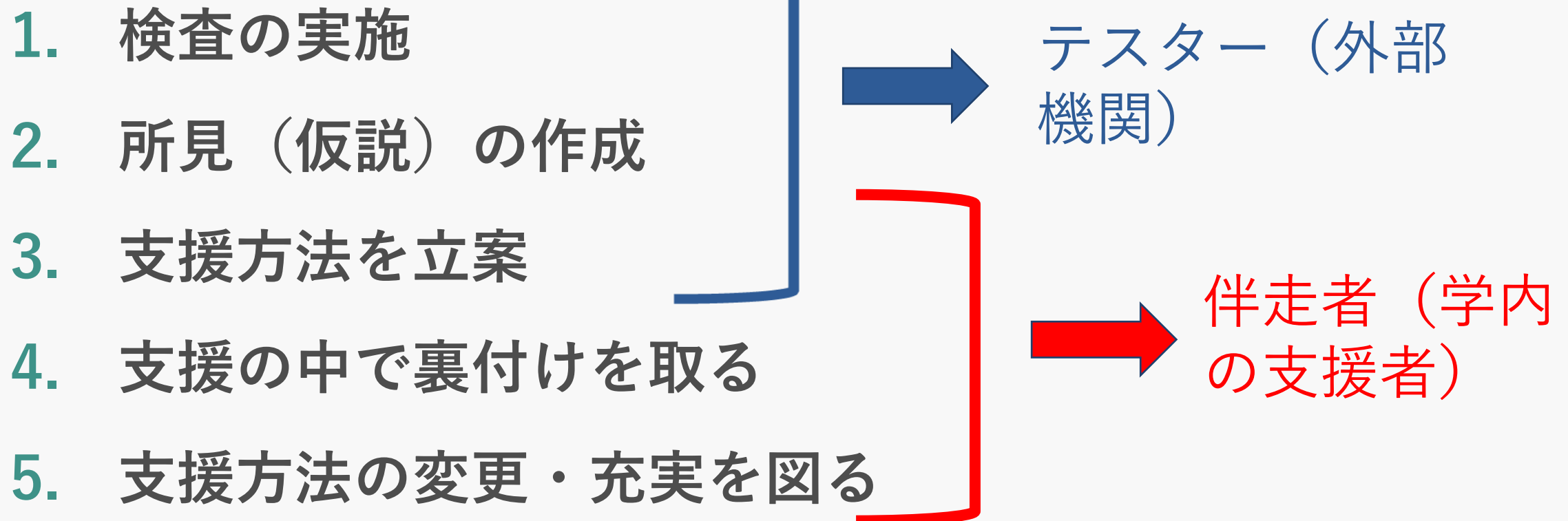
- 発達障害特性を有する方の支援には、WAISをはじめ、さまざまなアセスメントツールが用いられるが、依然として「診断」のためのツールとして用いるにとどまり、支援にあたって継続的に使用していくという視点が乏しい

WAISを実施する目的

- 支援者がクライアントの特性を知ることが一番の目的ではない
- WAISを用いて行うべきことはアセスメントと自己理解の深化であって「診断（補助）」ではない
 - WAISを用いた診断：WAISで示される指標の多寡を用いて発達障害を診断・判定しようという試みは古くから行われてるが、決定的な根拠となるような知見は得られていない

大学生支援におけるWAISの実施・利用の流れ

- 実施から支援までが分業で行われることが少なくない



大学における支援でWAISを利用する際の課題

2. 所見の作成（テスターとして感じた課題）

- プロセス・アプローチに基づく所見の作成が時間的制約から難しい
- 裏付けが取れていない仮説段階の所見を提出せざるを得ない

4. 支援の中で裏付けを取る（大学教員として感じる課題）

- 「アセスメント」の一人歩き：検証が行われないうまま所見の内容に基づく支援が行われてしまう



学生自身の特性に対する十分な理解に至らない

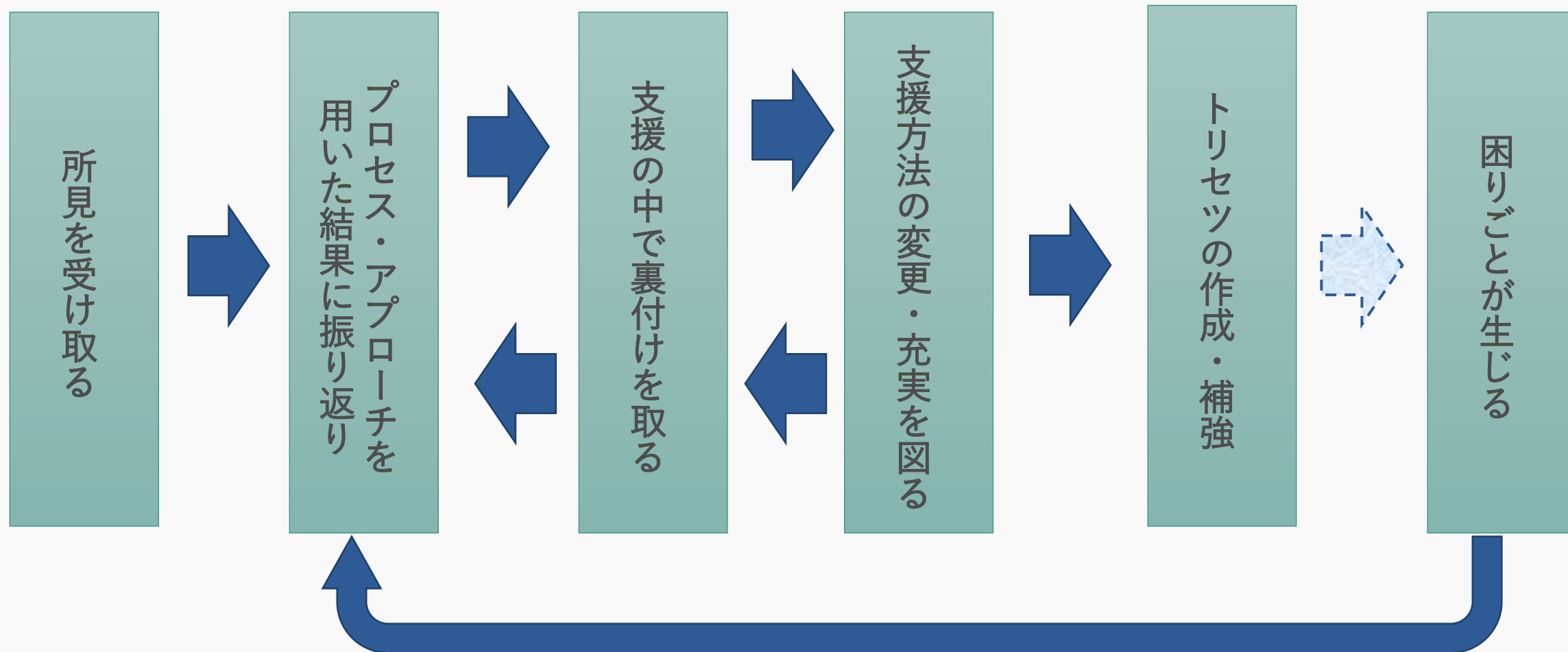
「頭での理解」から「腑に落ちる理解」へ

- 腑に落ちる理解：情報が個体に入力された後に起き、情報から導き出される行動の生起頻度を上げる認知的状態（重松他，2017）⇔頭での理解
- 腑に落ちる理解には体験やセラピスト（伴走者）との協力的な関係を通して、クライアント自らが「発見」していくことが重要

対話を通して「所見」から「オーダーメイドのトリセツ」へ

- 所見は仮説の1つにすぎない
- 伴走者が日々の支援の中で所見（仮説）の裏付けを取る（検証する）必要がある
- 具体的には…
 - ・ プロセス・アプローチを用いた振り返り
 - ・ 日々の生活で困り感が生じるごとに検査結果に立ち返り trial and error で作戦会議を行っていく

WAISを伴走のツールとして利用する



まとめ

- WAISは「診断」のツールではなく、伴走（アセスメント・自己理解の深化）のためのツールである
- 所見は、伴走者との継続的な対話を通し、本人の語り（体験）と検査結果を行きつ戻りつするなかで「オーダーメイドのトリセツ」に進化する
- そうした対話を通して、腑に落ちる理解へとつながり、自己理解の深化と行動変容に至る